

郷土室だより

第136号

平成22年2月25日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 21-033

「変りゆく都市像」(15)

《やさしい経済学》

◇資本主義はいつから？

この号は前号に引き続き◇古代日本のハイウェイから書き始める予定だったが、昨年の暮れも押し迫った12月下旬、《やさしい経済学》「社会科学」で今を読み解く」という表題で、「日本経済と市場主義」という論説が「日本経済新聞」に連載された(09・12・21〜31に九回)。書き手は寺西重郎氏(日本大学教授 経済学者・金融史)である。

その論説の冒頭は次の言葉から始まる。すなわち「市場とは、資本主義の根幹を成す制度の一つである…」

この私にとっては違和感に満ちた「市場」を定義した《ことば》は、寺西氏のいう資本主義とは西欧の十八世紀後半に成立した『国富論』(アダム・スミス著、一七七六年)以後の概念であろうと推察できる。

それに対して、これまでにこの「変りゆく都市像」の連載を通じている

いような角度から紹介してきた市場、古くは日本という国の成立以前の市場から、ごく最近の公設青果市場のあり方までの「いちば種々相」のスケッチで明らかにしてきた事柄、つまり「時代とともに市場は変化する」という事実の確認の仕事から見れば、前記のように論説の最初から「市場とは、資本主義の根幹を成す制度の一つ」という表現の仕方は、著しく短絡的な言い回しのように思われる。つまり市場とは資本主義社会に固有な制度だと誤解されかねない表現なのである。

ここでいわゆる経済学の枠から少し離れて、一五九六年(慶長元年)ころに成立したといわれるシェークスピアの四大戯曲の一つ『ベニスの商人』の場合を見ると、そのあらすじは高利貸のシャイロックの、利息の取立てをめぐる法廷闘争劇であ



東京工業品取引所

る。この時点でさすがに西欧中世の代表的な都市国家だったイタリアのベニス(「ベネツィア」とも表記)では高利貸＝金融業の存在が際立っていたことが分かる。

◇日本の場合

一方わが国の場合はこの連載の第一回に述べた「オランダ西鶴」の場合同様、『日本永代蔵』(元禄元年＝一六八八年刊)をはじめ、その死後刊行された『西鶴織留』(元禄七年刊)などに、「金が金を呼ぶ世の中」、つ

まり資本が利息を産む実態を克明に描写している。

その金融業の成立の条件の一つである貨幣制度は、ベニスに限らず、日本では奈良時代の「和同開珎」^{ちん} 鑄造以来、その存在が知られているが、この貨幣は銅貨だけではなく銀貨もつくられていて、それが中国から逆輸入されてもいる。

それ以後の戦国時代末期までの貨幣制度変遷史はここでは省略するが、近世「資本主義」の象徴的事柄として、徳川家康は豊臣秀吉の生存中の文禄二（一五九三）年に「自領限り通用」の金貨として武蔵墨書小判の鑄造許可を求めて実現させている。

さらには徳川幕府という中央政権の確立（慶長八年＝一六〇三年）より二年前（慶長六年）に家康は、実子の後藤庄三郎光次を江戸日本橋の金座の責任者に任命して金貨の鑄造に当たらせている。このことは、この時期になると、「天下分け目」の大戦争には、財政的な裏打ちがなければ戦えなくなっていたことを物語るものでもある。つまり幕府という名目を取得す

る以前に、たとえ自領限りだといえ、地域の特質を反映させた金貨の貨幣鑄造権を確立させることが、天下人になるための必須の条件だったのである。

この近世初頭の、いいかえると徳川幕府成立当時の貨幣制度を概観すると、金・銀・銭の三貨制をとった。それは大きくは西日本地域（豊臣の勢力範囲および海外貿易基地の成立地域）における銀本位制に対する、徳川の本拠がある東日本の金本位制という、地理的特性を反映させた貨幣制度をつくり、さらにその上に、中世からの銭本位制を絡ませた。そしてこの三貨の相互に互換性（両替）を認めた。それは貨幣制度上の天下統一そのものであったのである。

つまり日本列島規模の交通路が武力により成立したことで、その必然的な結果として、東西各地域相互間の経済的交流が確立すると、各地域の商品の特徴をはじめ、気候差、輸送手段である貿易風や海流などの条件が変化する地域ごとに、日本列島のいたるところに「市」が立ち、多彩な相場が建てられた。

それは商品だけではなく、例えば「天下普請」の築城などの労働力の売買や、築城技術の伝播などのサービス行為に対してもそれぞれの地域に即した相場が立ち、それにともなう三種類の「貨幣」の流通も見られたのである。しかもこの「貨幣」は現金・銀だけではなく、為替（小切手）も発行されていた。

このような貨幣状況は四百年後の現在の経済諸制度、つまり《資本主義》社会のあり方とほとんど変わりが無いといえよう。ただしIT機器の登場によって実務的には大変化していることは断るまでもない。

再び《やさしい経済学》の「市場とは、資本主義の根幹を成す制度の一つである」という《ことば》にこだわれば、徳川家康時代に成立した三貨制（広範な市場活動の一端）に限っても、西欧近代経済学のお墨付きがないから「資本主義ではない」ということにならざるうか。

注 和同開珎のネクタイピン
手元に銀製で和同開珎の仿製

をあしらったネクタイピンというよりもネクタイ止めがある。裏面には上から「中華人民共和国 1973」王冠型の刻印に続いてSILVER。下部に「出土文物展開催記念」の文字が浮かぶ。さらにネクタイを挟む金具にもSILVERと刻印がある。日本の昭和四十八年に上野の国立博物館で記念に買ったものである。

これより少し前に湖南省長沙郊外の馬王堆で高官夫人のミイラが発見されたとき、同時にこの銀貨も発掘され、それをもとに鑄造されたものだった。色鮮やかな副葬品や絹織物の本場らしく各種の紗の色や形がまだまだに鮮やかにまぶたの裏に浮かぶ。このネクタイピンは銅貨ではない仿製銀貨の和同開珎の《里帰り》だったのである。

◇《最近の経済学》

はなしは今年の1月11日のことになる。鳩山首相は都内の書店で「新しい資本主義」（原丈人著）、「フラット化する世界」（トーマス・

フリードマン著) など28冊(計約5万円)の書籍を購入し、記者団の質問に答えて「資本主義も新しいものが求められている。それを日本の風土にどう生かすか勉強したいと思って購入した」と語ったという(翌日の新聞各紙の記事から)。

目前に迫った焦頭爛額ならぬ焦眉の危機に、必死で生活している庶民にとって、「いま」の日本にとっての新しい資本主義を勉強したいという《ことば》は、新年早々の地震で壊滅したカリブ海の某島の首長のコメントに似たものを思わせた。

注 焦頭爛額

起こりうる事故を未然に指摘して、その予防策を提案したが聞き入れては貰えず、実際に事故が起きて頭を焦がし額をただらせて働いたものが重い賞を受けた状況を言う言葉(漢書「霍光伝」)。

◇中央区内の取引所(市場)

はなしは一転する。江戸の昔か

ら主に中央区内の日本橋地区を中心に、多彩な市場が成立したことでは、これから改めて述べてゆく予定だが、この連載の中央区内の読者の要望もあって、現在の状況の一端を紹介する。

その前にお断りしなくてはならないのは、私は現在の証券取引所の改築前の、俗に「兜町のシマ」と呼ばれた建物および、その取引状況や、業務内容の説明などについては前後二回にわたって、非常に懇切丁寧な見学と説明を受けたことがある。いずれも中央区の修史事業の一環としての見学会に参加して学んだものであった。

その後、現在の建物に改築され、施設も一新されたのだが、それを見学する機会がないままに打ちすぎた。それゆえに現在のIT機器にあふれたこの市場の実情は《見たことも聞いたこともない》ないため、残念ながら割愛するほかはない。

とくに平成二十二年(2010)年の一月四日の大発会を機会に、いろいろと問題のあったIT機器の、というより新システムによって運営が開始されたのだが、目下

のところ順調に作動しているようである。

市場について《初歩的な検索》をすると、現在の中央区内には次のような施設がある。

1 証券業

- 大阪証券取引所東京支社 (日本橋茅場町1-5-8)
- 株ジャスダック証券取引所 (日本橋茅場町1-5-8)
- 株東京証券取引所(日本橋兜町2-1)

2 国内商品先物取引業

- 株東京工業品取引所Ⅱ略称・東工取(日本橋堀留町1-10-7所在)
- 株東京穀物商品取引所(日本橋蛸殻町1-12-5)

3 生鮮食品取引業

- 東京都中央卸売市場(築地5・6丁目)
- 魚類部卸売市場・青果部卸売市場・低温卸売市場・築地場外市場など。

このほか港区に食肉類の中央卸売市場、芝浦に日本食肉流通センターがある。

最大規模の証券関係の市場の現

況はここでは除外して、「国内商品」の取引所の現況の一部を簡単に紹介すると、前記の東工取を含めて全国に4商品取引所があり、そのうちの東工取の売買高は09年末現在で、「前年より30%減少。以下、中部大阪商品取引所は前年比46%減。関西商品取引所も前年比62%減などと、09年の売買高は六年連続で大幅に減少した」(以上『日本経済新聞』の報道記事)。

東京穀物商品取引所(日本橋蛸殻町1-12) 09年の売買高は前年比43%の減少(：以上は10年初頭現在の状況)。

なお「東工取」の属する《国内商品先物取引業》の属する「先物」とは、国語辞典的にいえば「将来一定の時期に受け渡す条件で売買契約をした商品」を意味する。

後述の多彩な商品のほかに、「外国為替・株式・債券・金融(金利)などを取引する先物市場もある。

○ また「主要相場」を形成するための市場として、東京工業品取引所を始めとする取引所で毎日・週一回、4週一回といったサイクルでそれぞれの相場が建てられ、一般には翌日の新聞に報道

される。以下は『日本経済新聞』に掲載された「主要相場」の上場品目である。現況は「日経商品指数」の対象は17種および主要商品指数が報道される品目は42種におよぶ。価格の基準は1970年平均1100としている。その品目と市場開催のサイクルは次のとおりである。

○ デイリー開場は9品目で、毎週各日「石油、貴金属地金、非鉄地金、半導体スポット、鋼材、天然ゴム、繊維、砂糖、小豆・大豆」の相場が立つ。

○ ウィークリー開場は、月曜日が「コメ、合板、海上運賃」。火曜日は「半導体、中国製綿布、飼料」。水曜日が「合繊維物、古紙、油脂、鉄スクラップ」。木曜日が「伸銅品、非鉄スクラップ・絹織物」。金曜日は「黒糖・砂糖小袋、石油製品、糖化製品」など。

○ マンスリー（4週1回開場）は月曜日が「ダイアモンド、スパイス」／「住宅用断熱材、合繊原料、大径角形鋼管」／「基礎石油化学品、倉庫保管業」など。

火曜日が「工業薬品」／「生コンクリート、石こうボード、電線」／「合繊織物、古紙、油脂」／「リードフレーム材、輸入鋼材、セメント、製菓材料、顔料、トラック運賃」／「染料、ステケウすり身、石油ガス（LPG）」。

◇多彩な商品

水曜日が「合成樹脂二次製品、レアメタル、炭素繊維」／「アルミニウム合金・圧延品、白金属地金、合成ゴム、製紙用パルプ、綿コーマー糸」／「玄ソバ、乾物、ゴマ」／「コンクリートパイル、板紙、コーヒー、フェロアロイ」／「合成樹脂、段ボールシート、乳製品」。

木曜日が「家庭紙、プロイラー部分肉、人材派遣」／「合繊長繊維、輸入毛糸、合繊紡績糸、国際航空貨物運賃」／「特殊鋼、輸入綿糸、オフイスビル賃料」。

金曜日は「液卵、塗料、飼料、肥料製品」／「木材、情報用紙」／「石油化学原料、液晶表示装置」／「洋紙」などがある。このほかの例としては原木市場は全国に21箇所あるという状況もある。このような商品の羅列を眺

めると、134号で取り上げた「日本の官市」の項でみたような、古代から律令制度時代の「京」の東西市で取りあつかった品目名を連想させるから妙である。

個人の日常生活に関連の深い「紙」の関連商品に限っても、証券市場では「パルプ・紙」で一括されているが、商品市場ではウィークリー（水曜日）市場での「古紙」、マンスリー市場では「製紙用パルプ」、「板紙」、「段ボール」、「家庭紙」、「情報用紙」、「洋紙」と賑やかである。こうした品目を見ると《毎度おなじみのちり紙交換》の商品である「古紙」、誰でもが毎日使うトイレットペーパーである「家庭紙」、オフイスに充満する「情報用紙」などが目に浮かぶ。多様な流通物資の容器の主力である「段ボール」、「板紙」も目に付く。

これらの上場品目は激しい社会状況の変化に応じて変化してゆくのであるが、日常の市況の変動とは別の関心で見守っていると、さまざまなドラマが想像されて興味は尽きない。

（鈴木理生）